

『タカラは足元にあり!』

金丸弘美 著



(合同出版・1,600円 税抜)

地方の活性化はとてシンプルだ

青木 宏高

(NPO法人「良い食材を伝える会」理事)

日本創成会議：人口減少問題検討分科会の発表では二〇四〇年に全国八九六市町村が消滅危機にあるという試算結果。東京に一極集中する編入超過は一四年連続になり、地方には限界集落が発生。こうした現状に対策を講じる地方創生を掲げた「まち・ひと・しごと創生法」が成立する。

この本を書いた金丸弘美さんは副題に「地方経済活性化戦略」を謳い、地方の活性化には地方経済を活性化することであり、その方策は「足元にある」と説く。本書では、地方が、仕事や雇用を創出する多数の具体例を紹介している。

例えば長野県川上村。高原立地の優位性を活かした高原野菜作りで高所得と後継者問題を解決する。また兵庫県豊岡市では、水田にコウノトリを放鳥して「コウノトリ育むお米」として田んぼの環境の良さをアピールする。さらに鳥獣害に苦

闘する三重県では、ジビエの食材としてブランド化に成功する。

そして第五章には、農業で六次産業化のトップランナーとしてつとに知られる「伊賀の里モクモク手づくりファーム」を紹介。三重県伊賀市の山間に農産物直売所、レストラン、カフェ、ウインナー工房、ハム工房、ビール工房、体験工房、温泉、宿泊施設、牧場など多様な施設を置く新しい形を創造した農業生産法人である。食と農をベースに生産、加工、販売まで一貫したファーム運営を展開してきた。この地は古くから伊賀豚の産地として知られ、伝統の継承がモクモクの出発点にあり、今なお地元重視の精神は息付いている。

因みに六次産業化とは、一次の生産、二次の加工、三次の流通・販売サービスを掛け算し、農業所得を増大する考え方。山間地のモクモクには年間五〇万人余が訪れ、売上額五十数億円。アルバイトも含め一〇〇〇人の雇用を創出する。

今こそ地方と東京の関係を变える最後の機会である、という声上がる。石破茂地方創生担当大臣は、日本経済は七割の地方経済で支えており、東京以外の経済をいかに伸ばせるかと話す。そこから農林漁業の新しい成長モデルを見出せるか、地方創生はどのように日本経済の在り方を再構築していくのが問われている。

地方を数多く訪ね歩いてきた金丸さんは、地域の産物に目を向け、あるいは地域を活かしたモノ作りに出会う。人間の可能性と地方の可能性に希望を抱かせる。脚下照顧の眼差しが面白い。

読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2016年5月1日~5月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 農業と経済 2016.6臨時増刊号 TPP合意 日本の農と食を再考する		昭和堂	1,700円
2 農林水産六法 平成28年版	農林水産法令研究会/編	学陽書房	13,000円
3 バターが買えない不都合な真実	山下 一仁/著	幻冬舎	820円
4 小さい農業で稼ぐコツ	西田 栄喜/著	農山漁村文化協会	1,700円
5 「結農」論	木内 博一/著	亜紀書房	1,600円
6 日本農業年報62 基本計画は農政改革とTPPにどう立ち向かうのか 日本農業・農政の大転換	谷口 信和/編集代表、 安藤 光義/編集担当	農林統計協会	3,200円
7 都市農業必携ガイド 市民農園・新規就農・企業参入で農のある都市づくり	本木 賢太郎、松澤 龍人、 小野 淳/著	農山漁村文化協会	2,700円
8 GDP4%の日本農業は自動車産業を超える	窪田 新之助/著	講談社	890円
9 森と山と川でたどるドイツ史	池上 俊一/著	岩波書店	880円
10 日経ビジネス 2016年3月28日号 発表! TPP時代に勝てる 農産物ジャパン		日経BP社	639円